森本桂先生を偲んで

吉武　啓
〒 901–0336　糸満市真壁 820（国研）農研機構 九州沖縄農業研究センター（糸満駐在）

先生はゾウムシ上科（以下，ゾウムシ）の研究者として顕著な業績を上げられる一方で，多年にわたり後進の育成に携わって来られました．九州大学の教員時代，学生として直接先生の指導を受けたゾウムシ研究者としては，沢田佳久博士（チョッキリ・オトシブミ類）や小島弘昭博士（ゾウムシ類）がおられます．また，定年退職後も同大学の名誉教授として研究活動を益々活発に展開され，ゾウムシの研究を志す学生を指導されました．その当時，先生の薫陶を受けた学生の一人が私で，博士号取得までの研究テーマを与えていただいたほか，一昆虫分類学徒としてあらゆる面で先生の背中を見ながら育ちました．

また，先生は他大学の学生やアマチュア愛好家とも広く交流を持たれ，ゾウムシに関する基礎知識から最新の知見まで，直接・間接的に広く伝授されました．その象徴がゾウムシ愛好家のバイブルと言える「原色日本甲虫図鑑第 IV 巻」の出版であり，数え切れないほど多くの同定依頼への対応であると言えます．その結果として，妹尾俊男博士（ヒゲナガゾウムシ類）をはじめ幾人もの研究者が輩出されたほか，全国各地にゾウムシの“パラタクソノミスト”（準分類学者）が育成されたことで，都道府県レベルでゾウムシ類の調査・研究が飛躍的に進展し，日本のゾウムシ相の解明に大きく寄与することになりました．

その他，これまでに先生は植物防疫所や農業試験場，林業試験場からの同定依頼や講義などに積極的に対応されることで，農学的な見地から行政ニーズにも応えて来られました．戦後に報告された害虫ゾウムシや外来ゾウムシのほぼ全ての同定を先生がされたと言っても過言ではありません．

高齢に達しても，そしてさらに病を得てもなお，決して先生の研究意欲が失われることはありませんでした．先生がとくに愛して止まなかったのはゾウムシの分類学的研究であり，文字通り最期の最期までゾウムシ分類学者としての人生を貫き通されました．ややもすれば挫折しがちな私としてはただただ頭を垂れるばかりです．

先生の存在なしにゾウムシ分類学者としての私は決して成り立ち得ませんでした．その一方，私はゾウムシ分類学者として先生のご期待に応えることができませんでした．残念ながら，今となっては自分の感謝の気持ちも反省の気持ちも直接先生にお伝えすることはできません．あれ以来，先生の言葉や先生と一緒に過ごした時間を思い起こしては感傷的になることの繰り返しです．一研究者としての先生の生き様は間違いなく私の琴線に触れました．先生の足元にも及ばない不肖の弟子ではありますが，せめて私もゾウムシの分類学者として生涯現役であり続けたいと思っています．

先生は，私にとって本当に大きな存在でした．これからもずっとあなたの背中を追い続けながら生きて行くことになるでしょう．決して忘れません．

巨星墜つ

丸山宗利
〒 812–8581　福岡市東区箱崎 6–10–1　九州大学総合研究博物館

森本先生とは九大大学院の試験（失敗）以後から，たびたび学会等でお会いし，励ましをいただいていた．それから縁あって，2008 年に現在の職場である九州大学総合研究博物館へ着任した．当時，先生はすでに退官され，現在は取り壊されている 50 周年記念講堂という建物の一室で研究を続けられていた．着任当初は時間もあったので，たまにフラっと森本先生の机を訪ねてはお話を伺うのが何よりの楽しみであり，お話を聞くたびに，その圧倒的な知識と仕事量に，背筋の伸びる思いがし

たものだった．

そんな日々のなか，とくに印象深いのは，クチブトゾウムシをまとめられていた際，ちょうど私が深度合成写真の撮影に凝っており，森本先生のご希望でその方法をお教えしたことである．機材の扱いから，コンピュータでの合成，写真の修正まで，とても多くの手順があるのだが，すでにご高齢であったにもかかわらず，先生はしっかりと習得され，論文の出版にあたって膨大な写真を撮影された．もし私が森本先生の年齢であったなら，深度合成できれいな写真が撮れることは知っていても，そんな面倒なことには手を出さないし，できるとも思わなかっただろう．お教えしつつ，私は内心驚いていた．しかし，私がびっくりしたこのことも，森本先生の研究に対するご姿勢に関する，象徴的な出来事の一つに過ぎなかった．

それから森本先生のお話を聞き，成し遂げたご業績を知るにつれ，先生はこれまでにもさまざまな新しいことに対して，一切臆することなく，挑戦を続けてこられたことがわかったのである．森本先生の偉大な業績に関して，その詳細は最後に背中を見て学んだ辻君や今田君の紹介に譲るが，とにかく日本の昆虫学全体を見ても際立って突出したものであることは間違いない．その背景には先生の底知れぬ進取の気概があったのだ．

ちょうど1年前，職場の大学構内での引っ越しがあった．その少し前に森本先生が脳梗塞で倒れられた．私と学生たちは，先生が復帰されたら研究に専念できるよう，文献を配架した研究室を作り，その隣をゾウムシ専用標本庫にすることにした．退院後，その部屋をはじめてご覧になられた先生は，「研究室と文献と標本が並んでいる．やっと理想の研究室ができた」と予想以上に喜んでくださった．

とても嬉しかったのだが，同時に，森本先生のような人間国宝級の研究者が，理想的な研究環境をまったく得られていなかった事実を思い知り，私は怒りに似た感情を抱いた．森本先生の不遇は，分類学という学問の不遇を象徴しているようにも思えたからである．そこで，学内外の人たちに森本先生の偉大な業績とその重要性を知っていただこうと，辻君や今田君を巻き込んで，この夏に森本先生の展示を行なった．弟子の小島さんや吉武君，妹尾さんもお祝いの文章を寄せてくださった．そして先生と，先生の研究をずっと支えてこられた奥様にも見ていただくことができた．森本先生のご逝去は，その矢先のことである．

森本先生，先生が私財をなげうって収集された万巻の文献や，先生が構築された東洋一のゾウムシコレクションは，私たちが大切に受け継ぎます．そちらでも大好きなゾウムシの研究を続けてください．

2号館の森本先生

藤本博文

〒760–0005　高松市宮脇町 1–17–4

長年使い慣れたガラケーをスマートフォンに替えて随分経つが，未だに操作に戸惑う．あの時，9月4日の水曜日もそうだった．知人のお祝い事を知らせようとスマホの電源を入れると，使う予定のない Facebook の画面が飛び込んできた．そこには丸山宗利氏が前日に投稿された，「今日，森本桂先生が，亡くなられました」から始まる衝撃的な文字列が記されていた．数年前から体調を崩されていたのは存じ上げていたが，まさか，この瞬間に訃報を知るとは想像していなかったし，受け入れられるものではなかった．「不幸は，自分が知らない間に，知らない場所で，勝手に育っていって，ある日突然，目の前に現れる（村上　龍「69」）」という一節が頭を駆け巡った．知人の慶事を知らせるはずだったスマホは，次の瞬間，恩師訃報を告げる道具に早変わりしていた．

森本先生と初めてお会いしたのは1993年，九州大学の理学部に入学してすぐの頃だったはずである．理学部に入学したにも関わらず，農学部昆虫学教室に頻繁に遊びに行き（さぞかし邪魔だったろうと猛省している），標本作製のアルバイトまでさせていただいたりしていたので，当時教授であった先生とも頻繁にお会いしていたはずなのである．しかし悲しいかな，学部生前半の頃はゾウムシに対する興味や知識が皆無だったため，先生との接点は殆どなく，初めてお会いした時の印